

【書 評】

野沢敏治『内田義彦——日本のスミスを求めて』

社会評論社，2016年，247頁

タイトルから連想される内容に期待して本書を繙いた読者は、目次を眺めて、多少の違和感を持つかもしれない。「私の二〇年来の日本思想史研究に一つの区切りをつけたもの」（「あとがき」）と著者が自己規定しているように、本書は内田義彦そのものを詳細に論じたというよりも、内田という稀有な「メンター」の思索と言葉に導かれた者による、戦中・戦後思想史研究であるからだ。内田の『経済学の生誕』（1953）を直接扱った後編よりも、その周囲をめぐる前編の方が分量として多く、読者は著者が描いた「内田義彦」追体験の旅程に誘われる構成になっている。

言い換えれば本書の魅力は、内田が唱えた「市民社会青年」の何たるかを見通せるところにある。内田が『日本資本主義の思想像』（1967）で提示した「市民社会青年」は、丸山真男や大塚久雄を含む世代の知識人のイメージを端的に表現する言葉として、これまでも多く言及されてきた。「市民社会青年」という知識人像が投げかけているのは、内田や丸山、大塚らを典型例とする戦中期の大学知識人が、息苦しい時代の中である程度共有していたであろう精神的態度とは何だったのか、という問題である。明治以降、社会科学は日本（政府）の発展に資するために導入され、統治の学として育まれた。しかし「市民社会青年」たちは、その社会科学をむしろ国家権力に対する精神的な抵抗の拠点として位置づけ、自己の専門を鍛えた。内田が「学問のための学問」を批判し、社会科学を使って「現実を読める」ことの大切さを学生たちに伝え続けたのは、こうした自由主義的な精神

的態度を強く意識していたからだ。

「市民社会青年」とは結局、「社会科学的リテラシーを用いて、日本や世界の現実を大局的に捉えられる人」のことである。著者が内田を評した「一風変わった、でも本当の経済学史家」（「まえがき」）という表現も、「市民社会青年」を補助線として考えれば、よく理解できる。内田は、「風変わり」（＝あまり学者然としていない、あるいは地に足が着いている）と「本当の」（＝知的に高度な）が交錯する人だったということである。

前編「戦中・戦後の青年たちの軌跡」は、そうした「市民社会青年・内田義彦」を準備した知的系譜が、彼自身の残した種々の言明を頼りに、そして時に著者自身の問題関心を付与されながら、丁寧にとどられていく。

「I 日本型経済の仕組みとその崩壊」では、主として山田盛太郎『日本資本主義』（1934）に依拠して、当時の社会科学思想史を検討する際の大前提である、講座派マルクス主義の考え方を整理する。他方で著者は、「補正」と称して細井和喜蔵『女工哀史』（1925）や渋谷定輔『農民哀史』（1970）に触れ、山田や内田とは異なる、フィールドワークに基づく現実観察の重要性も提示する。

「II 資本主義の構造変動」と「III 日本精神による近代批判とそれへの反批判」は、「市民社会青年」が生きたのと同じ時代の言論や生産体制に言及して、社会科学をめぐる戦中期の空気を多角的に描く。自由資本主義から管理資本主義への体制的転換（石橋湛山や高橋亀吉）や、大河内正敏率いる新興財閥の理研コンツェルンが導入した生産管理体制と能

力主義、科学技術や文明化に対するアンチテーゼを突きつけた橘孝三郎ら右翼革新や西谷啓治による日本主義…。これらはいずれも同時代的な言説だった。「市民社会青年」の分析では、講座派マルクス主義との関係から封建遺制批判を強調しがちであるが、内田が取り込んだ時代の空気は、もっと複雑なものだったことがここから分かる。

前編の白眉である「IV「市民社会青年」による新たな資本主義認識と政治主体の探求」は、大河内一男・武谷三男・大塚久雄・丸山真男の四者を素材として、「市民社会青年」が生み出した具体的な知的成果をたどる。その見方は、基本的に内田が彼らを読んだ読み方に即しているが、詳細な言及である点で、内田の意図をより正確に覗くことができるだろう。

後編「市民社会の経済学の成立」は、前編での準備作業を経た上で、改めて戦中・戦後の内田の思想的軌跡を追うパートである。「I 内田義彦の戦中の模索」と「II 戦後の歩み」は、公開されている研究ノートや書簡、講演活動や時評に触れながら、初期の内田の思考を跡づけている。珍しいのは、内田関わった東大音感合唱研究会の活動について述べている部分だ。内田の音楽好きは有名だが、彼はこの合唱研究会で指揮者・理論的指導者として活躍していたという。その音楽指導はきわめて科学的理論的であり、方法として練り上げられたものだった。「科学的」であることへのこだわりを、自身の趣味にまで一貫させた内田の人物像が見え、彼の著作に惚れ込んだ者にとっては興味をそそられる部分だろう。最終章である「III『経済学の生誕』」では、ここまで確認してきた知的道程のゴール

として、内田のアダム・スミス研究がいかなるものだったかを、デビュー作『経済学の生誕』に即しながら論じている。

内田が簡単に触れただけのような事柄でも丁寧にすくい上げているため、彼の思想が何を材料としていたかを見通しつつ、その著作を読み解いていくガイドとして、本書は有益である。ただし留意しておきたい点もある。第1に、関連する文献の書誌情報が豊富とは言えない。この時代の日本思想史にある程度精通していれば、勘を働かせて出所をたどることはできるが、そうでない者が文献を特定することはかなり難しい。内田を読むガイドブックになるといっても、初心者というよりは、かなり玄人向けである。

第2は、もう少し本質的な点である。本書は、はたして『経済学の生誕』を論じることで終わってよかったのだろうか。前述したように、本書が結果として明らかにしているのは、自身の専門領域を通じて社会を理解しようとした「市民社会青年」の姿である。本論の結びが「スミス研究は日本を切開し、その前途に光をあてる」とあるのは、本書の狙いを表現するものだと理解する。しかし『生誕』そのものはあくまでスミス研究であり、それが戦後日本をどのように「切開」するものだったのかは、実は不明瞭である。作品自体に語らしめる、あるいは読者がそれを積極的に読み込むことは要請されるにしても、『生誕』を解説して終わるのでは、「市民社会青年」の意義を、それを知らぬ読者に伝えるのは難しいのではないか。だとすれば当然、議論の射程は「市民社会青年」を論じた後年の著作にまで伸ばされるべきだろう。

(小野寺研太：日本女子大学)